

# 人権なら

2021年8月1日

第128号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

## 「差別と人権」研究集会開催へ

### 9月4日、田原本青垣生涯学習センターで

第12回奈良県「差別と人権」研究集会の第2回実

行委員会が7月2

8日、田原本町青

垣生涯学習セン

ターであった。関

係者が出席。開

催要綱、協賛団体、任務分担などを確認した。とくに、

今回はコロナ禍での研究集会となる。感染予防対策

を徹底し、しっかり対応していくことを確認した。

ことしの「差別と人権」研究集会は9月4日午前9時半から、田原本町にある田原本青垣生涯学習センター弥生の里ホールで開く。午前中は開会行事や記念講演を行う。午後はパネルディスカッション。そのあと、集会まとめをして、午後4時半に終了する。

会場では、写真展『闇から光へ』知らされる沖縄の戦後史—精神保健の歩みを見る』も催す。

### 記念講演は藤原辰史・京都大准教授に

記念講演は、藤原辰史・京都大学准教授(写真)が

「コロナパンデミックと差別—この

国の今を考える」の演題で話す。

藤原さんは農業史、食と農の思想

などが専門。昨年4月、「パン

デミックを生きる指針—歴史研究

のアプローチ」を発表し、注目された気鋭の学者だ。

パネルディスカッションは、最首悟さん(和光大学名誉教授)〈リモート参加〉、高橋年男さん(公益社団法人沖縄県精神保健福祉連合会事務局長)、加藤めぐみさん(社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会ハンセ



ン病回復者支援センターコーディネーター)の3人のパネラーが報告。渡辺哲久さん(社会福祉法人ひまわり常務理事)がコーディネーターを務め、討議する。

### 「コロナパンデミックと差別」をテーマに論議

私たちの社会生活はコロナで一変。人と人との関係が断ち切れ、ふれあいが消えた。弱者に被害が

襲い掛かる。文明社会は大きな分

岐点に。この間、格闘してきた差別

をめぐる問題に、

コロナパンデミックで浮かび上がった国と社会の現状を重ね、「コロナパンデミックと差別」をテーマにじっくり議論し合うことにする。写真は一昨年(2019年)の研究集会。



### 第12回奈良県「差別と人権」研究集会

◆9月4日(土)午前9時半～午後4時半

◆田原本町・田原本青垣生涯学習センター

(磯城郡田原本町阪手233-1)

◆テーマ「コロナパンデミックと差別—この国の今を考える—」

◆記念講演 藤原辰史・京都大学准教授「コロナパンデミックと差別—この国の今を考える」

◆パネルディスカッション パネラーは①最首悟さん(和光大学名誉教授)〈リモート参加〉②高橋年男さん(公益社団法人沖縄県精神保健福祉連合会事務局長)③加藤めぐみさん(社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会ハンセン病回復者支援センターコーディネーター)。

◆参加費 3500円(弁当代含む)



## 青少年自立支援の現場から

### 浜田進士さんが三宅町人権学習講座で講演

2021年度の三宅町地域人権学習講座が始まった

＝写真。全5回で、初回が7月27日、MiiMoであった。



町教育委員会の藤川・教育総務課長が、本事業はあらゆる差別を許さない人づくりをめざすもの。本日は浜田さんから提起を受ける。今後も積極的参加を、とあいさつ。

古川友則・NPOなら人権情報センター理事長は、人権尊重のまちづくり条例が制定されている。住民に人権尊重の理解を求め、その主体として積極的に関わっていただくことがねらい。今年度の講座は5回を予定。最後までお付き合いを、とあいさつした。

### 自立援助ホーム「あらんの家」などを運営

浜田進士さんが「子どもにはチカラがある」と題して話をした＝写真。浜田さんは大学卒業後、ユニセフに

勤めた。30代のとき、バングラデシュの路上で暮らす子どもの支援に関わる。その後、大学教員を経て、8年前、いじめや虐待、性的暴力を受けて家族とは暮らせない青少年の自立を支える施設、自立援助ホームを奈良県で設立した。



自立援助ホームには、いろんな支援が寄せられる。三宅町では、森田浩司・町長がグローブを贈呈してくれた。お寺おやつクラブやフードバンク奈良の支援もあった。とても助かり、感謝している。

コロナ禍の1年半、子どもたちはどういう状況に陥ったのか。青年たちは外国人労働者、実習生の次に解雇され、仕事がなくなった。

児童福祉法が2016年に改正された。国連の子ど

もの権利条約に基づき、施策が進められるようになった。子どもにも必要な施策を聞くことが必須となった。

### 「子どもには存在するだけでチカラがある」

子どもには、存在するだけでチカラがある。虐待されてきた子たちは、人を信じようとして誰かと会うことで生き直しが可能だ。親から虐待や性的暴力を受けた子たちも、生き直せるプロセスが可能となる。

シンナーや薬物や麻薬の経験のある子たちもいる。でも、何歳からでもやり直しができる。18、19歳が虐待の親から逃げるのは、社会制度的な仕組みからして簡単なことではない。

当初は、ホームの壁が穴だらけになったことがある。今はすごく落ち着いている。コロナ禍で虐待の通報が3倍になった。高校生以上になると、男性は「あらんの家」、女性は「ミモザの家」で預かる。急いでコンビニに走って下着などの準備をすることもある。

コロナ禍で家族だけで生活しているとストレスが溜る。次第に生活困窮に追い込まれる。6月に通報が多かったのは、その反動が虐待やDVになったからだ。

### 「弱さもチカラ」「自分を否定せずに…」

ホームに入居するきっかけは、虐待、性的暴力、ネグレクト、児童養護施設での暴力行為など、様々だ。安全が安心とつながらない。安全な環境がこのまま続くのかが不安になる。その中で、様々に”ゆらぎ”が生じる。次に甘えや人との距離感がバラバラになったりする。そのうち、”ゆらぎ”は少しずつ収まる。

ホーム退去後の支援はとても大切。自分に役割があり、あてにされる存在としてスタートすることが重要だ。居場所の提供や、生活上の支援、住居支援、就労支援などがある。自立とは、新たな依存先を見つけ、増やしていくことだ(依存先の分散)。自分で出来なくても、頼める関係があれば良い。弱くても、中途半端でも、要領が悪くても良い。弱さもチカラだ。たった一人でも自分を否定せずに、共に居てくれる関係に気付けば、人は生きていくことができる、と話した。



## 三宅町でアイヌ巡回展

### アイヌ民族の民具や衣装展示を大勢が観賞

巡回展「先住民族アイヌは、いま」が7月26日から31日まで、三宅町にある「あざさ苑」であった。会場には、アイヌ民族の民具や衣装などが展示された＝写真。巡回展は連日、午前10時から4時まで開かれ、多くの人を訪れ、観賞した。



29日には、三宅町まちづくり交流センターMiiMoで講演があった。講演に先立ち、「先住民族アイヌのいまを考える会」委員長の浅川肇さんが、地元関係者にお礼を述べ、「アイヌの人たちへの深い理解と学びの機会であってほしい」。森田浩司・三宅町長はアイヌの「自然と共に暮らしてきた」歴史を知ること、自然との共生や多様性について学びたい、と述べた。

### 出原昌志さんが講演「盗掘されたアイヌ遺骨…」

講演では、「先住民族アイヌの声実現！実行委員会」の出原昌志さんが「盗掘されたアイヌ遺骨と私たち」のテーマで話をした＝写真。



出原さんは、19世紀末から始まるアイヌ遺骨の大量の盗掘は、欧米帝国主義の植民地支配の正当化、「人種主義や優性思想」が背景にあった。日本のアイヌへの植民地支配とともに進められた。つまり、遺骨の盗掘を考えることは、その歴史と向き合うことだ。盗掘されたアイヌ遺骨を研究対象とすることはアイヌ民族差別だ、と話した。

講演会は、参加者が多かったため、午後1時からと、午後2時30分からの2回に分けて開催された。

次の巡回展は8月14、15日に大和高田市で開催。

## 「カンボジアからの風」展

### 10年目を迎えた展。喫茶「みそら屋」で開催中

第10回「カンボジアからの風」展が7月7日から、三宅町あざさ苑にある喫茶「みそら屋」で開催中だ。8月4日まで。今回は10年の節目。展では、サンタピアップが支援をしているポイペトの人たちの手作り雑貨や、アクセサリーを販売している。カンボジアで活動する日本人の団体も出店。「みそら屋」とのコラボでできたTシャツなどを販売している。



7月22日には、カンボジアと日本をつないで「インスタライブ」があった。代表の古川沙樹さんが現地から登場。スタッフも参加して、楽しい時間を過ごした。

### 在大阪カンボジア領事館が来訪し、HPで紹介

7月13日には、在大阪カンボジア領事館の館員が展にやって来た。領事館のホームページで展を紹介してくれている(<http://www.cambodia-osaka>)。

展では、「カンボジア風練乳アイスコーヒー」や、「ココナツミルクプリン」「バタフライピーと柚子のスカッシュ」「Knock on 特製コーヒーゼリー」なども提供している。

「サンタピアップ」とは、カンボジア語で平和を意味する。



ポイペト郊外の村で貧困問題に直面している人たちに一方的にお金やモノを与えるのではなく、技術を習得してもらい、自らお金やモノ、仕事を生み出す力をつけてもらうことを目標に活動している。

「みそら屋」は障害を持つ人たちが力を合わせて働く場。社会福祉法人ひまわりが運営している。

## 奈良県議会が意見書を可決

### 遺骨眠る土砂の基地建設埋め立て使用に反対

奈良県議会は7月2日、「沖縄戦戦没者の遺骨を含む土砂を基地建設の埋め立てに使用しないよう求める意見書」を全8会派が全会一致で可決。政府に提出した。沖縄県以外の都道府県議会では初めて。

沖縄・辺野古の米軍新基地建設地の埋め立てに沖縄戦の激戦地だった本島南部の戦没者の遺骨が眠る土を使う計画に反対する意見書は、大阪府茨木、吹田市議会など、本土の地方議会でも可決している。

### 県出身者ら「物言わぬ」戦没者を二度殺す行為

意見書は「南部一帯には本県出身戦没者をはじめ多くの戦争犠牲者の人々が眠っている」と当事者意識に訴え、戦没者の遺骨を基地建設に使用することは、「犠牲者の人々の尊厳を冒瀆し、『物言わぬ』戦没者を二度殺すような人道に反する行為」と批判する。糸満市にある「魂魂の塔」のそばには、奈良県出身戦没者を慰霊する「大和の塔」が建立している。

意見書の決議は、奈良沖縄県人会や奈良－沖縄連帯委員会など3団体が県議会に要望し、実現した。

### 編集後記 ★★★★★★★★★★★★

「緊急事態宣言」下にある東京。コロナ感染者は連日、数千人超え。なのに、強行開催中の祝福されない五輪。巨額のマネーを乱費し、ゴタゴタ続きでやって来た。五輪は特別として種々の抜け道も。一方で、ワクチン接種をめぐる迷走や、飲食店への恫喝で不安や怒りが渦巻く。「安全安心の大会」を叫び続けるだけの政府。「信頼信用」を完全に失った。支持率は30%を切る。人々を危険に晒し、分断し、生活破壊に追い込む挙動で、もはや修復不可能な傷跡を残すことに。五輪効果など、とても期待できない。この社会を変えるには、立ち止まって考え、動き始めることが重要だ。

## イカイノ物語ファイナル公演

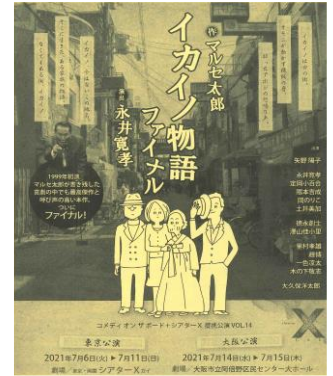
### マルセ太郎の実体験をもとに書かれた喜劇

「イカイノ物語ファイナル」公演が7月14、15日、大阪・阿倍野区民センターであった。この作品は作者マルセ太郎の実体験をもとに書かれた喜劇で、初演は1999年だ。

猪飼野は大阪・生野区にある韓国・朝鮮人が集住するかつての地名。

物語は「イカイノ」を舞台にチェサ(祭祀)と呼

ばれる韓国式の法事の日には母ハルモニ(在日一世)の住む次男の家に子どもたちとその家族や親戚が集う。厳格な作法があるチェサのお供えや飾りについて、親戚同士が言い争う。酒癖の悪い次男と兄との諍(いさか)いが周囲を巻き込み、次々と騒動が巻き起こる。



### 日常の悲喜こもごもな出来事を描く

一家団欒の中で語られるハルモニの戦前、戦後のエピソード。在日の人たちの日常の悲喜こもごもな出来事。当然のようにあり続ける差別。やがて、長女のがん発症、在日三世となる孫の大学進学や日本女性との結婚、ハルモニの認知症発症…。そこにイカイノを飛び出した兄とイカイノに根を張り家族と暮らす弟の思いが交差する。在日であることの誇り、日本国籍を取得する決意、望郷の念。在日一世と子どもや孫たちの世代との共感と溝。最終章、認知症のハルモニが白のチマチョゴリ姿で踊り歌う。魅了された。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/